

王羲之と道教

一 はじめに

『晋書』王羲之伝に拠れば、王羲之は国を憂え民を愛する官僚であり、また山水自然を愛する風流人でもあった。唐の太宗は羲之を敬愛し、『晋書』王羲之伝には「制曰」として次のように記されている^[1]。

書契之興、肇乎中古。繩文鳥跡、不足可觀。末代去朴帰華、舒賤点翰、争相誇尚、競其工拙。伯英臨池之妙、無復餘蹤、師宜懸帳之奇、罕有遺跡。逮乎鍾王以降、略可言焉。鍾雖擅美一時、亦為迴絶、論其尽善、或有所疑。至於布織濃、分疏密、霞舒雲卷、無所間然。但其體則古而不今、字則長而逾制、語其大量、以此為瑕。

猷之雖有父風、殊非新巧。觀其字勢、疏瘦如隆冬之枯樹。覽其筆蹤、拘束若嚴家之餓隸。其枯樹也、雖槎枿而無屈伸、其餓隸也、則羈羸而不放縱。兼斯二者、故翰墨之病歟。

子雲近出、擅名江表。然僅得成書、無丈夫之氣。

猷之は父の風有りと雖も、殊に新巧あるに非ず。其の字勢を觀るに、疏瘦にして隆冬の枯樹の如し。其の筆蹤を覽るに、拘束ありて嚴家の餓隸の若し。其の枯樹たるや、槎枿すと雖も屈伸無く、其の餓隸たるや、則ち羈羸して放縱ならず。斯の二者を兼ねるは、故り翰墨の病なるか。

子雲は近ごろ出で、名を江表に擅にす。然れども僅かに書を成すを得るのみにして、丈夫の氣無し。行行、春蚓を榮らすが若く、字字、秋蛇を縮ぐが如し。王濛を紙中に臥せしめ、徐偃を筆下に坐せしむ。千兎の翰を禿すと雖も、聚むるに一毫の筋無く、萬穀の皮を窮むるも、斂むるに半分の骨無し。茲を以て美を播くは、其れ名を濫りにするに非ずや。

此の数子は、皆な誉れ其の実に過ぐ。所以に古今を詳察し、篆素を研精するに、善を尽くし美を尽くすは、其れ惟だ王逸少なるか。其の点曳の工、裁成の妙を觀るに、煙のごとく罪ひ露のごとく結び、状は断ゆるが若くにして還た連なり、鳳のごとく翥ち龍のごとく蟠り、勢ひは斜めなるが如くして反て直し。之を断するに倦を為すを覺えず、之を覽るに其の端を識る莫し。心に慕ひ手に迫ふは、此の人のみ。其の餘の区々の類は、何ぞ論ずるに足らんや。

ここで太宗みずから「尽善尽美、其惟王逸少乎」（善を尽くし美を尽くしているのは、ただ王羲之だけであろう

佐藤利行

行行若榮春蚓、字字如縮秋蛇。臥王濛於紙中、坐徐偃於筆下。雖禿千兎之翰、聚無一毫之筋、窮萬穀之皮、斂無半分之骨。以茲播美、非其濫名邪。

此数子者、皆誉過其実。所以詳察古今、研精篆素、尽善尽美、其惟王逸少乎。觀其点曳之工、裁成之妙、煙霏露結、状若断而還連、鳳翥龍蟠、勢如傾而反直。翫之不覺為倦、覽之莫識其端。心慕手追、此人而已。其餘区区之類、何足論哉。

書契の興るや、中古に肇まる。繩文鳥跡は、觀る可きに足らず。末代、朴を去りて華に帰し、賤を舒べ翰に点し、争ひて相ひ誇尚し、其の工拙を競ふ。伯英が臨池の妙、復た餘蹤無く、師宜が懸帳の奇、遺跡有ること罕なり。鍾・王以降に逮びて、略ぼ焉を言ふ可し。鍾は美を一時に擅にし、亦た迴絶を為すと雖も、其の善を尽くすを論ずれば、或いは疑はしき所有り。織濃を布き、疏密を分かち、霞のごとく舒び雲のごとく巻くに至りては、間然する所無し。但し其の體は則ち古くして今ならず、字は則ち長にして制を逾え、其の大量を語るに、此を以て瑕と為す。

か）と言い、また「心慕手追、此人而已。其餘区区之類、何足論哉」（心に慕い手に追ひ求めるのは、ただ王羲之だけである。その他のつまらぬ類いは、どうして論ずるに足ろうか）と言うように、太宗は非常に羲之を敬愛していた。

太宗は自らの財力と権力とに物を言わせ、羲之の手になる作品を可能な限り収集し、そうして集めた羲之の書を全て陪葬させたと言われている。太宗がここまで羲之を敬愛したのは、勿論、羲之の書の素晴らしさに太宗が魅了されたであろうことは言うまでも無いが、王羲之という人間そのものにも太宗は魅力を感じていたのではなからうか。

以下、小論では、王羲之という一個の人間像を探るために、羲之と道教との関わりを視点として、主に羲之の手になる書翰資料を中心として検討を加えたい。

二 王羲之の書翰

「書聖」として有名な東晋の王羲之（三〇三～三六一）の書は、後世、書の手本として珍重されてきた。いわゆる法帖として多くのものが今日に伝えられている。そのうち例えば「十七帖」は、二十九首の羲之の書翰を収めたもので、初めが「十七日、先書」で書き出されているので「十七帖」と呼ばれている。今、「十七帖」冒頭の書翰の内容を見てみよう^[2]。

十七日、先書。郗司馬未去。即日得足下書、為慰。先書以具。示復数字。『右軍』一・『二王』中）十七日、先に書す。郗司馬は未だ去らず。即日、足下の書を得て、慰めと為す。先の書に以に具はる。復た数字を示すのみ。

すなわち、「十七日、先にお手紙を出しましたが、郗司馬はまだ出発しておりません。（手紙を出した）その日に、あなたのお手紙を受け取り、喜んでおります。先の書に詳しく述べましたので。以上、ご連絡まで」という内容のものである。ここに見える「郗司馬」とは郗曇（三二〇～三六一）のことで、羲之の妻の弟に当たる。郗曇の娘は羲之の子の王献之の妻となった。

咸康六年（三四〇）、羲之三十八歳の時、郗司馬（曇）は司馬昱（簡文帝）が撫軍將軍となった時に、その司馬となった。ついで尚書吏部郎に除せられ、御史中丞を拝した。従って此の書翰は、曇が司馬になった、咸康六年頃に書かれたものであると思われる^{〔3〕}。

このように、今日までに残された王羲之の書翰は合わせて七百条に近い数のものがあり、これは王羲之の研究にとっては非常に貴重な資料である。しかし、羲之の書翰は、もともと公開されることを前提にされていなかった。言い換えれば公開されることを前提とした中国文学の伝統的な文学形式である「書」とは、全く異質の極めて私的なものであるため、その内容を把握することが甚だ難

しいものであった。

例えば、書翰に見られる多くの語彙は、いわゆる当時の口語と思われるもので、その意味の把握は難しい。また、文法的にもやはり口語の影響を受けたと想像されるものが多く用いられている^{〔4〕}。

更に殆どの書翰は、ごく親しい人に宛てたものであり、中には次に挙げるように僅か数字程度のものも多くある。

卿大小佳。『右軍』392

卿の大小は佳なるか。

得申近問不。『右軍』105

近問を申ぶるを得たりや不や。

今、付呉興酢二器。『右軍』120

今、呉興の酢二器を付す。

最初の手紙は「お宅の皆様はお元気ですか」、次は「最近の様子を知らせる手紙はありましたか」、最後のものは「今、呉興の酢二瓶をお送りします」といった内容のものである。このように羲之の書翰は、言わば今日我々が携帯でメールをするが如き感覚で書かれているようである。

また、羲之の書翰の中には「信使」という語も見られる。すなわち、

が残されている。

信使甚数、而無還者、似書疏不可得。得問、宜示告之。知長翔田舎、比卿還。当知何候。須得音。副民望甚善。『右軍』235

信使は甚だ数しばなるも、而も還る者無く、書疏は得可からざるに似たり。問を得ば、宜しく之を示告すべし。長翔の田舎に、比る卿の還らんとするを知る。当た何れの候なるかを知らん。音を得んことを須つ。民望に副ふは甚だ善し。

「信使はよく出て行くのですが、戻って来る者は無く、便りをもたうことができないようです。便りがあつたら、どうか私に見せて下さい。長翔の田舎に、近いうちにあなたが帰られるということを知りました。いったい何時ごろになるのですか。連絡を待っております。民の願いにそうことは大変よいことです」という内容の書翰である。ここの「信使」とは、恐らく手紙を運ぶ使者のことで、当時はこうした「信使」が頻繁に行き来をしており、こうした信使に書翰を託したものだと思われる。

ところで、そもそも七百条にも及ぶ膨大な書翰が、なぜ今日まで残つたのであろうか。

そのことを物語る逸話が『晋書』卷八十「王羲之伝」に記されている。すなわち『晋書』本伝には、羲之の書が生存中から珍重されていたことを示す次のような逸話

又山陰有一道士、養好鷺。羲之往觀焉、意甚悦、固求市之。道士云、「為写道德經、当举群相贈耳」。羲之欣然写畢、籠鷺而帰、甚以為樂。其任率如此。又た山陰に一道士有り、好鷺を養ふ。羲之往きて焉を觀、意甚だ悦び、固く之を市らんことを求む。道士云ふ、「為に道德經を写さば、当に群を挙げて相贈るべきのみ」と。羲之は欣然として写し畢り、鷺を籠にして帰り、甚だ以て樂しみと為す。其の任率なること此の如し。

すなわち、「また、山陰県に一人の道士がいて、好い鷺鳥を飼っていた。羲之は出かけて行つてそれを見、たいそう気に入る、どうしても売ってほしいと頼んだ。すると道士は、「老子の『道德經』を写してくださるなら、この鷺鳥を全て差し上げます」と言った。羲之は大喜びでそれを写し終え、鷺鳥を籠に入れて帰って、大変それを楽しんだ。およそ彼の任率（思いのままにふるまうこと）ぶりは、このようであつた」というものである。羲之が鷺鳥を愛好していることは『晋書』にも他に記載があるが、ここでは道士が鷺鳥の対価として羲之の書を欲しがったということで、羲之の書は生前からすでに高い評価を得ていたということが分かる。また、次のような記載もある。

嘗詣門生家、見裴几滑淨、因書之、真草相半。後為其父誤刮去之、門生驚懊者累日。

嘗て門生の家に詣り、裴の几の滑淨なるを見、因りて之に書し、真草相半ばす。後、其の父の為に誤りて之を刮り去られ、門生の驚懊する者、累日なり。

「かつて門人の家に行き、裴の木の机の滑らかなのを見て、それに字を書いたが、真書と草書とが相半ばしていた。後にその父が誤って（その字を）削り去ってしまった。門人は何日もふさぎこんでいた」というものであるが、ここからも羲之の書が高く評価されていたことが分かる。更に、次のような事も記されている。

又嘗在戴山、見一老姥、持六角竹扇売之。羲之書其扇、各為五字。姥初有慍色。因謂姥曰、「但言、是王右軍書。以求百錢邪」。姥如其言、人競買之。

又た嘗て戴山に在りて、一老姥の、六角の竹扇を持ちて之を売るを見る。羲之は其の扇に書して、各おの五字を為す。姥は初め慍る色有り。因りて姥に謂ひて曰く、「但言へ、是れ王右軍の書と。以て百錢を求めんか」と。姥、其の言の如くするに、人競ひて之を買ふ。

「また或る時、戴山で一人の老婆が、六角の竹扇を売

っていた。羲之はその扇に五文字ずつ書いてやった。老婆は初め機嫌が悪かった。そこで羲之は『ただ「これは王右軍の書だ」と言えば、百錢で売れよう』と言った。老婆がその通りにすると、人々は競って買い求めた」。

これら『晋書』本伝に記載されている逸話を見れば、羲之の書は当時から甚だ重んじられていたことが十分に理解できる。今日の我々が、有名人や高名人の書いたものを珍重するのと同じである。

こうして恐らく羲之から書をもらった人は、それを大切にしていたものと想像される。そのことを示す羲之の書翰がある。

上方寛博多通、資生有十倍之。竟是所委息。乃有南眷情。足下謂何以。密示。一勿宣此意。為与卿共思之。省已、以付火。『右軍』313

上方は寛博にして通ずること多く、資生は之に十倍する有り。是れ委息する所なるを覚ゆ。乃ち南眷の情有り。足下は何を以てせんと謂ふや。密かに示す。一に此の意を宣ぶること勿れ。卿と共に之を思はんとするが為なり。省已はれば、以て火に付せよ。

「あちらは土地が広く、物資の流通も頻繁で、利益はこの十倍もあります。ここが落ち着き場所ではないかと

思います。そのため南の方へ移ろうとする気持ちがあります。あなたはどう思われますか。こつそりお話ししているのですから、決して口外なさないように。あなたと二人だけで相談したいと思うからです。ご覧になったら、燃やして下さい」という内容の書翰であるが、一家の長としての王羲之は、王家を支えるための経済についても心を配っていたようである。

さて、この書翰で注目されるのは、「省已はれば、以て火に付せよ」という結びの言葉である。内容が内容だけに、この手紙を燃やすように、という忠告に反して、現にこの書翰が今日に残されているということは、やはり受け取った人が羲之の書の価値を認め、燃やすことが出来なかったのではなからうか。

このようにして、七百余にも及ぶ王羲之の書翰は大切にされ、我々はその内容を知ることができることとなったのである。

三 王家と道教

王羲之の家は代々、張氏の五斗米道、すなわち道教を信奉していた。殊に羲之の次男の凝之は、狂信的な信者であり、鬼兵の援助を当てにして賊に対する備えをせず、賊に攻められて殺されてしまったということが、『晋書』王羲之伝に、次のように記されている。

有七子、知名者五人。玄之、早卒。次凝之、亦工草

隸。仕歴江州刺史、左將軍、会稽内史。王氏世事張氏五斗米道、凝之彌篤。孫恩之攻会稽、僚佐請為之備。凝之不從。方入靖室請禱、出語諸將佐曰、「吾已請大道、許鬼兵相助。賊自破矣」。既不設備、遂為孫恩所害。七子有り、名を知らるる者五人。玄之は、早く卒す。次は凝之、亦た草隸に工みなり。仕へて江州刺史、左將軍、会稽内史を歴たり。王氏は世よ張氏の五斗米道に事へ、凝之は彌いよ篤し。孫恩の会稽を攻むるや、僚左は之が備へを為さんことを請ふ。凝之は従はず。方に靖室に入りて請禱し、出でて諸將佐に語りて曰く、「吾は已に大道に請ふに、鬼兵もて相助くるを許す。賊は自ら破れん」と。既に備へを設けず、遂に孫恩の害する所と為る。

「七人の子があり、名の知れた者は五人であった。玄之は早く亡くなった。次男の凝之は、また草書・隸書に巧みであった。仕官して江州刺史、左將軍、会稽内史を歴任した。王氏は代々、張氏の五斗米道を信じていたが、凝之はとりわけ信仰が篤かった。孫恩が会稽を攻めた時、部下が防備をするように願ったところ、凝之はそれに従わず、靖室に入って祈禱をし、おわって部屋から出てくると、將軍や属官にむかつて言った、『私が神にお願いをして、鬼兵が助けてくれることになったから、賊はおのずから破れるはずだ』と。こうして防備をしなかったの

で、孫恩に攻撃されて殺されてしまった」というものである。

それでは、義之自身と道教との関わりは、どのようなものであったのか。以下、義之の書翰の中から、道教と関わりのある言葉の見えるものを取り上げてみよう。

姉適復二告、安和。郗故病篤、無復他治、為消息耳。

憂之深。今移至田舎、就道家也。事畢、吾当遣信。

〔右軍〕37

姉より適たま復た二告ありて、安和なり。郗は故より病ひ篤く、復た他の治無く。消息を為す耳。之を憂ふること深し。今、移りて田舎に至り、道家に就くなり。事畢れば、吾は当に信を遣るべし。

「姉からたまたま二通の手紙がありましたが、元気にしているようです。郗はやはり病気が重く、別に治療の方法も無く、安静にしているしかありません。とても心配です。今、田舎に移って、道家の先生の所におります。御祈祷がすんだらお知らせいたします」という内容である。ここに見える「道家」という語は、道教の先生、すなわち道士のいる所を指す。

期已至。遲還具足下問耳。当力東治道家。無緣省告、但有悲慨。不得東此月間。

〔淳化〕四

あなたが知りがつていたので、お便りしました。家に留まっていなさいよ」という内容であるが、ここに見える「大先師」も、恐らく「道士」のことであろう。

七月十六日、義之報。凶禍累仍。周嫂弃背、大賢不救。哀痛兼傷、切割心情。奈何奈何。遣書感塞。義之報。

〔右軍〕186

七月十六日、義之報ず。凶禍は累りに仍なる。周嫂は弃背し、大賢は救はれず。哀痛兼ねて傷み、心情を切割す。奈何せん奈何せん。書を遣れば感塞す。義之報ず。

「七月十六日、義之報ず。不幸がたび重なりました。周嫂が亡くなられ、大賢も救うことができませんでした。哀しい上にも痛ましく、心も張り裂けんばかりです。どうしたらよいのか。どうしたらよいのか。お手紙を差し上げるにつけ、胸のつまる思いがします。義之報ず」。ここに見える「大賢」も前の手紙にある「大先師」と同じく「道士」のことを言うのであろう。

以上の書翰に見えるように義之は「道士」（「大先師」「大賢」）を頼って病気の平癒を願っていたようである。道士による祈禱を「救命」と言っていたことが、以下に挙げる書翰によって分かる。

期は已に至らん。還りて足下の問を具にせんことを還つ耳。当に力めて東して道家に治すべし。告を省るに縁無く、但だ悲慨有るのみ。東よりの此の月の問を得ず。

「期はもう（そちらに）着いたでしょう。（期）が帰って来て、あなたの様子を詳しく知らせてくれることを待っております。なんとか東の方へ行って道家の先生に治療してもらわなくてはならないでしょう。お手紙を拝見することも無く、悲しみ歎くばかりです。東の方からの今月の（様子を知らせる）手紙もありません」。この書翰にも「道家」の語が見えている。

次に挙げる書翰には「大先師」という語が使われている。

日五期結、極以大先師之言。皆著推此、言之無驗、如此。事君当欲知、故及。宜停宅。

〔淳化〕五

日に五たび結を期し、極むるに大先師の言を以てす。皆な著はして之を推すも、言の驗無きこと、此の如し。事は君の当に知るを欲すべきことなれば、故に及ぶ。宜しく宅に停まるべし。

一日に五回も結果を願い、大先師のお言葉を唱え続けました。すべて神に申し上げたのですが、この言葉に効果のないことは、以上の通りです。この事については、

省別、具足下小大問、為慰。多分張。念足下懸情。武昌諸子、亦多遠宦。足下兼懷。並教問不。老婦頃疾篤、救命恒憂慮。餘粗平安。知足下情至。

〔右軍〕13・〔淳化〕三

別を省て、足下の小大の問を具にし、慰めと為す。分張するもの多し。足下の懸情を念ふ。武昌の諸子も、亦た遠宦するもの多し。足下は兼ねて懷はん。並びに数しば問ありや不や。老婦は頃る疾ひ篤く、救命するも恒に憂慮す。餘は粗ぼ平安なり。足下の情の至れるを知る。

「別状を拝見して、お宅の皆様の様子がよくわかり、安心いたしました。地方に出ておられる方が多く、さぞかし心配なことと思います。かつての武昌の仲間も、遠くに赴任している者が多く、あなたも会いたく思っております。皆さんからの便りはしばしば有りますか。老妻は近ごろ病気が重く、祈禱をしてもらっておりますが、いつも憂慮しております。その他の者は、だいたい無事です。あなたのお心づくしを知り、うれしく思っております」。

諸賢子粗足自枝注、示吾弱息毀弊。大兒恒救命、足令人心焦。先是之懼、於今皆為哀苦。自非復衰年所堪。豈復以既往累心。率事自難為懷。如之何。

〔王右軍集〕二

諸賢子は粗ぼ自ら枝注たるに足るに、吾に弱息毀弊を示す。大の児は恒に救命し、人の心をして焦が令むるに足る。是より先の懼び、今に於いて皆な哀苦と為る。自ら復た衰年の堪ふる所に非ず。豈に復た既往を以て心を累はさん。率^{おほむ}ね事は自ら懷^{おも}ひを為し難し。之を如何せん。

「あなたのお子さんたちは、十分、自分だけでやって行けるのに、息苦しくて疲弊していると私に言っておられます。大の子供はいつも御祈禱をしてもらっており、私を心配でいらさせます。以前の喜びは、今になってすべて哀しみと苦しみになりました。これらは年寄りに堪えられることではありません。こうしてまた過ぎ去ってしまったことで心を煩わせたりしましょうか。だいたい何事も思うにまかせぬものなのです。どうすることもできません」。

懷足下、可謂礼之□。今以志心寄卿。想必至到。論之、救命不暇。此事、於今為奢遠耳。要是事其本心。

《右軍》162)

懷ふに足下、之に礼すること□と謂ふ可し。今、志心を以て卿に寄す。想ふに必ず至^{いた}らん。之を論じて、救命に暇あらず。此の事、今に於いて奢遠と為す耳。要是是れ其の本心を事とするなり。

初採葉於桐廬県之桓山、餌^く朮^{じゆつ}涉三年。時欲斷穀、以此山近人、不得專一、四面藩之。好道之徒、欲相見者、登樓与語、以此為樂。常服氣、一氣千餘息。永和二年、移入臨安西山、登巖茹芝、眇爾自得、有終焉之志。乃改名玄、字遠游、与婦書告別、又著詩十二首、論神僊之事焉。義之造之、未嘗不彌日忘帰、相与為世外之交。玄遺義之書云、「自山陰南至臨安、多有金堂玉室、仙人芝草。左元放之徒、漢末諸得道者、皆在焉」。義之自為之伝、述靈異之跡甚多。不可詳記。玄自後、莫測所終。好道者、皆謂之羽化矣。初め、葉を桐廬県の桓山に採り、朮^{じゆつ}を餌^くひて三年を渉る。時に穀を断たんと欲するも、此の山の、人に近くして、專一するを得ざるを以て、四面に之に藩^{かき}す。道を好むの徒、相見んと欲する者あらば、樓に登りて与に語り、此れを以て樂しみと為す。常に氣を服し、一氣もて千餘息す。永和二年、移りて臨安の西山に入り、巖^{いわ}に登り芝を茹^くひ、眇^{めう}爾として自得し、終焉の志有り。乃ち名を玄、字を遠游と改め、婦に書を与へて別れを告げ、又た詩十二首を著し、神僊の事を論ず。義之の之に造^{つく}るや、未だ嘗て日に彌^{わた}りて帰るを忘れずんばあらず、相与に世外の交りを為す。玄は義之に書を遺^のして云ふ、「山陰の南^よ自り臨安に至るまで、多く金堂玉室、仙人芝草有り。左元放の徒、漢末の諸もろの得道者は、皆な焉^なに在り」と。義之は自ら之が伝を為^{つく}り、靈異の跡を述ぶること甚だ多し。詳^{つまひつ}かに記す可から

「思いますに、あなたがこのことについて取られた礼は（ ）とすることができるとでしょう。今、私の気持ちをおあなたにお伝えします。きつと分かつて下さることでしよう。このことを論じておりましたので、祈禱の時間がなくなりました。この（礼についての）ことは、今では本来のものと懸け離れております。要是本心に従うことが大切なのです」。

これらの例を見れば「救命」とは、道士に祈禱をしてもらうことを言っているようであるが、義之は病氣の治療を中心に道士を信賴しており、道教を信奉していたことが十分に想像される。

ところで義之にとつての道教の師は、許邁であつた。許邁については、『晋書』王羲之伝にその略伝が付されている。

始義之所与共游者、許邁。字叔玄、一名映。丹陽句容人也。

始め義之の与^{とも}共に遊びし所の者に、許邁あり。字は叔玄、一名は映。丹陽・句容^{くわうじやう}の人なり。

と書き出される略伝では、許邁と義之との関わりについて、次のように記述している。

ず。玄は自後、終る所を測る莫^なし。道を好む者は、皆な之を羽化せりと謂ふ。

すなわち「初め、桐廬県の桓山で葉を採ったときは、朮^{おけら}を食べて三年を過ごした。そのころ、穀物を絶とうと思つたが、この山が人家に近く、それに専念することができないので、四方に藩^{かき}を作った。道家の徒で、彼に会いたい者は、樓に登つて話をし、それを樂しみとした。常に氣を服し、一呼吸で千餘回の呼吸に相当した。永和二年、臨安の西山に移り、岩に登つて靈芝を食べて、はるかに仙道を自得し、この地で生涯を終える決心をした。そこで、名を玄、字を遠游と改め、妻に手紙を書いて別れを告げ、また詩十二首を作り、神仙の事を論じた。義之がここに来ると、何日も帰るのを忘れなかつたことはなく、互いに世外の交わりを結んだ。玄は義之に手紙を遺して、『山陰の南から臨安にかけて、金堂玉室や仙人芝草が多くあり、左元放の徒ら、漢末の諸々の得道者が、皆ここにいる』と言つた。義之は自ら彼の伝記をつくり、数々の靈異の事跡を述べたが、ここに詳しく記すことはできない。玄はその後、どこで終つたか分からない。この道を好む人たちは、彼は羽化昇天したのだと考えた」というものである。

許邁との出会いが何時のことであつたかは不明であるが、恐らく義之が会稽の地にやって来てからのことであるろう。

こうした許邁との交わりを通して、義之は服食養生に努めることになり、薬方にも大いに興味を懐いていくようになった。

四 服食養生

『世説新語』言語篇に、

何平叔云、服五石散、非唯治病、亦覺神明開朗。
何平叔云ふ、五石散を服すれば、唯だに病ひを治するのみに非ず、亦た神明開朗なるを覺ゆ、と。

「何平叔が言うには、『五石散を服用すると、ただ病氣が治るだけではなく、心が伸び伸びと朗らかになる』と」と見え、その注に引く秦丞相（承祖）「寒食散論」に、

寒食散之方、雖出漢代、而用之者寡、靡有伝焉。魏尚書何晏首獲神効、由是大行於世、服者相尋也。
寒食散の方、漢代に出づると雖も、之を用ふる者寡く、伝ふること有る靡し。魏の尚書何晏は首めて神効を獲、是れに由りて大いに世に行はれ、服する者相尋ぐなり。

「寒食散の処方、漢代に始まったが、それを服用する者は少なく、処方伝える者も無かった。魏の尚書であった何晏がはじめてそのすぐれた効き目を得て、それか

のもある。

追尋傷悼、但有痛心。当奈何奈何。得告慰之。吾昨頻哀感、便欲不自勝。且服散行之、益頓乏。推理皆如足下所誨。然吾老矣。餘願未盡、唯在子輩耳。一旦哭之。垂尽之年、軋無復理。此当何益。冀小却漸消散耳。省卿書、但有酸塞。足下念故言散、所豁多也。王羲之頓首。
追尋しては傷悼し、但だ痛心有るのみ。当た奈何せん奈何せん。告を得て之を慰む。吾は昨頻りに哀感し、便ち自ら勝へざらんと欲。且に服散して之を行ふも、益ます頓乏す。理を推すに皆な足下の誨ふる所の如し。然れども吾は老いたり。餘願の未だ尽くさざるは、唯だ子輩に在る耳。一旦之を哭す。垂尽の年、軋た復する理無からんとす。此れ当た何の益あらん。小却か漸く消散せんことを冀ふ耳。卿の書を省るに、但だ酸塞有るのみ。足下言散して、豁くする所の多からんことを念故せよ。王羲之頓首。

「思い起こしては悲しみ、ただ心が痛むばかりです。一体どうすればよいのか。お手紙をいただいて心が慰ましました。私は昨日、悲しくてたまらなくなり、とても我慢することなどできませんでした。朝になって服散したのですが、ますます元気がなくなっていました。そのわけを考えてみますに、すべてあなたのお考えの通りで

ら世に流行するようになり、服用する者も相次いだ」というように、魏の何晏（字は平叔）以来、魏・晋の貴族の間では「五石散」が流行し、それは服食養生の中心であつた⁵⁾。

さて、この五石散に関する王羲之の書翰には、次のようなものがある。

服足下五色石膏散、身輕、行動如飛也。足下更与下七、致之不。治多少、尋面言之。委曲之事、实亦□人。尋過江言散。
足下の五色石膏散を服するに、身は輕くして、行動は飛ぶが如くなり。足下は更に七を与下へて、之を致すや不や。治の多少は、尋いで面して之を言はん。委曲の事、実に亦た人を□。尋いで江を過ぐれば言散せん。

すなわち、「あなたからいただいた五色石膏散を服用したところ、身は軽くなり、行動はまるで空を飛んでいるかのようです。あなたはさらに七服分を分けて下さり、送っていただけませんか。治癒の状況については、またお会いしてお話ししましょう。詳しい事は、また人を（やります）。そのうちに（彼が）江を渡れば氣晴らしをしましょう」という内容から、義之自身も五石散を服用していたことが分かる。

この書翰の内容と関連するものとして、次のようなも

す。ところで私は年老いてしまいました。心に残っていることは、ただ子供たちのことだけです。ところが、にわかになにを死を哭することになろうとは。残りわずかな年齢になり、とても病氣が治る望みもありません。服薬していったい何の益があるのかと思います。しかし、少しづつでも薬を飲んで治したいと願っているわけです。あなたのお手紙を見ては、ただ悲しみに胸がふさがるばかりです。あなたは氣を晴らして大きな氣持ちでいるようにして下さい。

ここに見える「服散」も、或いは五石散を服用することであろうか。いずれにせよ義之はこうした服薬によつて、塞いだ氣持ちを晴らすようにしていたのであろう。

ところで、そもそも「五石散」というのは、どのような物であつたのか。そのことに就いては、中国の著名な文学者魯迅（一八八一―一九三六）が、一九二七年九月に広州における夏期學術講演会で行つた「魏晉風度及文章与藥及酒之關係」と題する講演の中で、次のように述べている。

「五石散」是一種毒藥、是何晏吃開頭的。漢時、大家還不敢吃、何晏或者將藥方略加改變、便吃開頭了。五石散的基本、大概是五樣藥。石鍾乳・石硫黃・白石英・紫石英・赤石脂、另外怕還配点別樣的藥。

すなわち、『五石散』は一種の毒薬で、何晏がまず最初に飲みはじめたのです。漢の時代、人々はまだ飲むとしなかった。何晏は処方はいくらか改良して、それから飲みはじめたのかもしれない。五石散の基本は、石鍾乳・石硫黄・白石英・紫石英・赤石脂、たぶんこの五つの薬です。ほかにも少し別の薬を調合したのかもしれない」と⁶。

或いはこうした薬石の一種であろうか。義之の書翰には「紫石散」というものが見える。

二十九日、義之報。月終、哀摧傷切。奈何奈何。得昨示、知弟下不斷。昨紫石散、未佳。卿先羸甚。好消息。吾比日極不快。不得眠、食殊頓勿。令合陽、冀当佳。力不一。王羲之報。

二十九日、義之報。月は終らんとし、哀摧にして傷みは切なり。奈何せん奈何せん。昨の示を得て、弟の下の断えざるを知る。昨の紫石散、未だ佳ならず。卿は先ごろ羸ること甚だし。好く消息せよ。吾は比日、極めて快ならず。眠るを得ず、食は殊に頓勿なり。陽を合せ令め、当に佳なるべきことを冀ふ。力不一。王羲之報ず。

二十九日、義之報。月も終わろうとし、感慨深くなつてしまいます。どうしたものでしょう。昨日のお便りで、あなたの下痢が治らないことを知りました。先日

ちらに)着くでしょう。詳しい知らせを待っております。楽公も先生に会って安心することと思います。桃膠は手に入れやすいのですが、(使う量は)少なくすべきでしょう。一つの物ばかりを用い続けるのは、よくないと思います。充は迎えてくれますか。お知らせ下さい。陽が仕進する気になっていることを知りました。みんながよくしてくれることを願っております。

「桃膠」とは、桃の樹から出るやにのことで、『本草綱目』卷二九には「血を和し氣を益し、下痢を治し、痛みを止む」とある。書き出しの「先生」とは、先に挙げた道士の許邁のことである。

以下、薬方に関わる王羲之の書翰を見てみよう。

噉豆、鼠傷如佳。今送。能噉不。

豆を噉へば、鼠傷に佳なるが如し。今、送る。能く噉ふや不や。

「豆を食べれば、鼠傷に効くようです。今、お送りします。食べられますか」という内容であるが、恐らく鼠にかじられた傷を治すのに効果のある豆を羲之が教えているのであろう。

石脾、入水即乾、出水便湿。独活、有風不動、無風

紫石散も、まだ効かないようですね。あなたは先頃ひどく疲れておられたからです。どうかお大事に。私は近頃とても具合を悪くしており、よく眠れませんが、食もまったく進みません。陽に合わせるようにして、元気になることを願っております。早々、羲之報ず」。ここの「消息」は、今は休息し養生することと解したが、或いは様子をお知らせ下さい、の意かもしれない。「合陽」とは、陰の氣を避け、陽の氣に合わせるようにすることを言うものと思われる。

五 王羲之と薬方

王羲之の書翰の中には、薬方に関する多くの書翰が残されている。

先生頃可耳。今日略至。遅委悉。知楽公可為之慰。

桃膠易得、可以少耶。專一物不移、乃不忠也。充迎不。致意。知陽意事進。願人之善。

先生は頃ろ可なる耳。今日、略ぼ至らん。委悉を遅つ。楽公の之が為に慰む可きを知る。桃膠は得易きも、以て少しくす可き耶。一物を専らにして移さざるは、乃ち忠ならざる也。充は迎ふるや不や。意を致せよ。陽の意、進むを事とするを知る。人の善くせんことを願ふ。

「先生は近ごろ元氣にしています。今日ぐらいには(そ

自揺。天下物理、豈可以意求。唯上聖乃能窮理。

石脾は、水に入れば即ち乾き、水より出だせば便ち湿る。独活は、風有るも動かず、風無きも自ら揺く。天下の物理、豈に以て意もて求む可けんや。唯だ上聖のみ乃ち能く理を窮む。

「石脾は、水に入れると乾き、水から出ると湿ります。独活は、風が吹いても動かないが、風が無くても揺れ動きます。天下の物の理は、どうして人の心で推し量ることができましようか。ただ聖人のみが理を窮めることができるのです」。ここに「石脾」は、『本草綱目』石部に「石脾は西戎の鹵地に生じ、碱水の結成する者なり」とあり、「独活」(うどの一種)については、『本草綱目』草部に「諸々の中風・湿冷を治す」とある。これも羲之が薬方について手紙の相手に説明をしているもののようである。

須狼毒。市求不可得。足下或有者、分三兩。停須。

告示。『淳化』五17・『二王』上51)

狼毒を須む。市に求むるも得可からず。足下、或いは有ら者、三兩を分けてよ。停まりて須つ。故に示す。

「狼毒が必要です。市場で搜したのですが手に入れることができませんでした。あなたがもしお持ちでしたら、

三両ほどお分け下さい。(こちらに) ずっと停まつて待つておりますので。それでお便りした次第です」というものである。「狼毒」は、『本草綱目』草部に「聾を治す」とあることから、恐らく義之の所に聾を患っている人がいて、薬を待つていたのであらう。

「聾」に関連する内容の書翰としては、

天鼠膏、治耳聾。有驗否。有驗者、乃是要藥。

天鼠膏は、耳聾を治すと。驗有りや否や。驗有ら者、乃ち是れ要藥なり。 (『右軍』11)

「天鼠膏は、耳聾を治すということですが、効き目があるでしょうか。もし効き目があるとすれば、大切な薬です」という内容のものがある。王弘の「十七帖述」には「凡そ鼠胆は能く耳聾を治す」とある。

このように、王義之は親しい人たちと薬方の情報を共有し、ともに服食養生に努めていたと思われる。

六 目前の娛しみ

こうした日々の生活の中で、義之の心を慰めてくれていたのは、可愛い孫たちであつた。義之には次のような書翰がある。

十月七日、義之報ず。前に足下に過りて、得る所の其の書、想ふに殊に勞弊有り。然れども叔兄は子孫数人有り、目前の情を慰むるに足らん。……

「十月七日、義之報ず。以前、あなたの所に立ち寄つて受け取つた、先方からの手紙によれば、ことに苦勞が多いように思われます。しかし叔兄には子や孫が数人あり、目前の情を慰めるのには十分でしょう。……」。

しかし、その可愛い孫が夭折するという、この上もない悲しい出来事に義之は見舞われる。

官奴小女玉潤、病來十餘日、了不令民知。昨來忽發癰、至今轉篤。又苦頭癰、頭癰以潰、尚不足憂。癰病少有差者、憂之焦心、良不可言。頃者、艱疾未之有。良由民爲家長、不能剋己懃修、訓化上下、多犯科誠、以至於此。民惟歸誠待罪而已。此非復常言常辭。想官奴辭以具。不復多白。上負道德、下愧先生。夫復何言。

官奴の小女玉潤は、病み來たりて十餘日なるに、了く民をして知ら令めず。昨來、忽ち癰を發し、今に至りて轉た篤し。又た頭癰に苦しむも、頭癰は以に潰れ、尚ほ憂ふるに足らず。癰病は少しく差ゆる者有るも、之を憂ひて心を焦ましむること、良に言ふ可

吾有七兄一女。皆同生。婚娶以畢、惟一小者、尚未婚耳。過此一婚、便得至彼。今内外孫有十六人、足慰目前。足下情致委曲。故具示。

〔右軍〕20・『淳化』三・『二王』上

吾に七兄一女有り。皆な同生なり。婚娶は以に畢るも、惟だ一小者のみ、尚ほ未だ婚せざる耳。此の一婚を過ぐれば、便ち彼に至るを得ん。今、内外の孫十六人有り、目前を慰むるに足る。足下情致は委曲なり。故に具に示す。

「私には七人の男の子と一人の女の子がおります。みな同じ腹から生まれたものです。結婚はほぼおわたつたのですが、ただ末の一人だけが、まだ結婚していません。この子の結婚がすめば、あちらに行くことができるでしょう。今、内孫外孫が十六人おり、今を楽しませてくれます。あなたのお心づくしに感謝しつつ、お便りしました」というように、義之にとつて可愛い孫たちは今この時を楽しませてくれるかけがえのない存在であつた。

「足慰目前」(目前を慰むるに足る) というのは、義之の考え方的一端を示す言葉で、次の書翰にも見ることが出来る。

十月七日、義之報。前過足下、所得其書、想殊有勞弊。然叔兄子孫有数人、足慰目前情。……

〔淳化〕四・『二王』中

からず。頃者、艱疾は未だ之れ有らず。良に民は家長と爲るも、己に剋ちて懃め修め、上下を訓化する能はずして、科誠を犯すこと多きに由りて、以て此に至るなり。民は惟だ誠に歸して罪を待つ而已。此れ復た常言常辭に非ず。想ふに官奴辭けて以て具にせん。復た多くは白さず。上は道德に負き、下は先生に愧づ。夫れ復た何をか言はん。

「官奴の小女の玉潤が、病氣になつてから十数日になりますのに、私には全く知らせがありませんでした。昨日から突然に持病が悪くなり、今はいよいよひどくなつております。その上、頭のできものに苦しんでおりまして、できものは已につぶれてしまい、もはや心配するには及びません。持病も少しはよくなつていたのですが、やはり心配で落ち着かず、本当に口では言えぬほどでした。近頃、こんなにもやつかない病氣は見たことがありません。これもまことに私が家長でありながら、我が身をつつしめ修養して、家族の者たちを訓化することができず、誠めを犯すことが多かつたから、このようなことになつてしまつたのです。私はただただ誠心誠意、罪を待つだけです。これは口先だけで言っているのではありません。官奴がすでに詳しく申し上げていると思いますので、もう多くは申しません。上は道德にそむき、下は先生に愧ずるばかりです。もう何も申せません」とい

う内容の手紙であるが、「官奴」すなわち王猷之の娘の玉潤が治療を受けていた道士の先生に宛てたものであろう。幼い孫娘の死に遭遇して、義之の悲しみはいかばかりであつたらうか。

延期官奴小女、並得暴疾、遂至不救。慙痛貫心。奈何。吾以西夕、至情所寄、唯在此等、以榮慰餘年。何意、旬日之中、二孫天命。旦夕在右、事在心目。痛之纏心、無復一至於此。可復如何。臨紙咽塞。

『右軍』176)

延期・官奴の小女は、並びに暴疾を得て、遂に救はれざるに至る。慙痛は心を貫く。奈何せん。吾は西夕を以て、至情の寄す所は、唯だ此れ等に在り、以て餘年を榮慰せんとす。何ぞ意はんや、旬日の中、二孫の天命せんとは。旦夕左右、事は心目に在り。痛みの心に纏るや、復た此に至る無し。復た如何にす可き。紙に臨んで咽塞す。

「延期・官奴の幼い娘は、どちらにも急に病気になる、そのまゝ命を救うことができませんでした。この痛む心はどうすることもできません。私は残り少ない歳になり、ただこれらの孫たちが楽しみで、餘年を慰めようと思つておりましたのに。旬日の中に、二人の孫娘が幼くして亡くなつてしまおうとは、思つてもみませんでした。いつでもどこでも、そのことばかり思い出されます。痛み

が心にまつわりつくこと、これ以上のものではありません。一体どうすればいいのでしょうか。この手紙を前にして、咽び泣くばかりです」。冒頭の「延期」とは、王延期のことで、義之の兄の籍之の子である〔7〕。

こうした身内の、それも幼い孫娘が死んでいくという悲しみを経験し、義之はよりいっそう今この時を充実して生きて行こうという思いが強くなつていったと想像される。

ところで、魏・曹操の「短歌行」に次のように歌われている。

對酒當歌 酒に対しては当に歌ふべし
人生幾何 人生は幾何ぞ
譬如朝露 譬ふれば朝露の如し
去日苦多 去日 苦だ多し
慨當以慷 慨して当に以て慷すべし
幽思難忘 幽思は忘れ難し
何以解憂 何を以てか憂ひを解かん
唯有杜康 唯だ杜康有るのみ

此の詩に込められた思いは、決して所謂「利那主義」的な感情ではない。一時的な快楽を追い求めるのではなく、あくまでも今のこの現実を充実して生きていこう、とい

う寧ろ積極的な思いである。

義之の言う「目前の楽しみ」とは、まさに此の「短歌行」に込められた曹操の思いと通ずるものではなからうか。今この時を充実させるために、義之にとつては「薬方」は大きな拠り所であつたに違いない。そうして道士を頼みとして「薬方」を究め「服食養生」に努めることによって、それは実践されると義之は考えていたのである。

七 冥界での義之の消息

ところで王義之と道教との関わりを示す資料としては、陶弘景（四五六―五三六）の『真誥』がある。『真誥』とは真人のお告げのことであり、南嶽夫人（魏華存）やその他の真人が降臨して口授したものを、弟子の楊羲や許謚らが書写し記録したものを、陶弘景が編集した。そこには茅山（南京の東南）を根拠として発展した道教の一派、上清派の教理が伝えられているという。その『真誥』巻十六「闡幽微」第二に次のような記述がある。

王逸少有事、繫禁中已五年。云事已散。

王逸少 事有りて、禁中に繫がれ已に五年。事已に散ずと云ふ。

これは冥界における王義之の消息についての「真人」のお告げの言葉である。これについての陶弘景の解説は以

下のようなである。

逸少即王廙兄曠之子。有風氣、善書。後為会稽太守。永和十一年去郡、告靈不復仕。先与許先生周旋、頗亦慕道。至昇平五年辛酉歲亡。年五十九。今乙丑年。説云五年、則亡後被繫。被繫之事、檢迹未見其咎。恐以懟憾告靈為謫耳。

逸少は即ち王廙の兄曠の子。風氣有り、書を善くす。後に会稽の太守と為る。永和十一年に郡を去り、靈に告げて復た仕えず。先に許先生と周旋し、頗る亦た道を慕ふ。昇平五年辛酉の歳に至りて亡す。年五十九。今は乙丑の年なり。説に五年と云へば、則ち亡後に繫を被る。繫を被るの事、迹を検ぶるも未だ其の咎を見ず。恐らくは懟憾もて靈に告ぐるを以て謫と為るのみ。

これに拠れば、義之は永和十一年に官界を去つてからは、許先生すなわち道士の許邁と山野を周遊して道教を篤く信奉したということである。

因みに、「義之は亡くなった後、五年の間、獄に繫がれているが、もう罪は無くなった」という真人のお告げについて、陶弘景は、「いろいろと調べてみても咎らしきものは何も無い。恐らくは両親の墓前で官界を去ることを誓った際に、『懟憾』の思いをもって靈に告げたためであろう」と言っている。

両親の墓前で誓った言葉というのは、『晋書』王羲之伝に載せる、

維永和十一年三月癸卯朔九日辛亥、小子羲之、敢告二尊之靈。

維れ永和十一年三月癸卯朔九日辛亥、小子羲之、敢へて二尊の靈に告ぐ。

で始まるものをいう。この文章の後に許邁との交流が次のように記されており、これは先に見た王羲之伝に附されている許邁の伝の内容と相通するものである。

又与道士許邁、共修服食、採藥石、不遠千里。徧游東中諸郡、窮諸名山、泛滄海、歎曰、「我卒当以樂死」。又た道士の許邁と、共に服食を修め、藥石を採りて、千里を遠しとせず。徧く東中の諸郡に遊び、諸名山を窮め、滄海に泛^ふび、歎じて曰く、「我は卒に当に樂しみを以て死すべし」と。

八 まとめ

今回は、王羲之の書翰を中心として、羲之と道教との関わりについて考察した。書翰は羲之みずから書いたものであるから、当然のことながら、そこに書かれた内容は羲之自身の心の思いであつたに違いない。しかし、「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」（『易経』）と

いうように言葉で表現された、その中にある真意を読み取ることは相当に難しい。

思い起こせば、恩師の森野繁夫先生とともに、王羲之の書翰の全訳に取り組み、『王羲之全書翰』を白帝社から出版したのは一九八七年のことであるから、既に三十年余りが経過したことになる。その間、私自身も此の書翰を資料として王羲之に関する幾つかの論文を書いてきたし、多くの研究者が『王羲之全書翰』を参考にして沢山の業績を出されている。

今後さらに羲之の書翰を読み深め、『晋書』『世説新語』およびその注などの資料と関連させながら、真の王羲之像に迫りたい。

注

〔1〕『晋書』の伝では、王羲之伝と陸機伝のみに「制曰」として太宗みずからの言葉が附されている。

〔2〕本稿で取り上げる書翰については、唐・張彦遠輯『右軍書記』（津逮秘書本『法書要録』所収、清・乾隆三十四年勅輯『淳化閣帖』（広雅書局刊『武英殿聚珍版』所収）、宋・許開撰『二王帖評釈』（横山草堂叢書）所収、明・張溥輯『王右軍集』（『漢魏六朝一百三家集』所収）を用いた。

〔3〕書翰がいつ頃書かれたものであるのかについては、その内容によって推測することが可能である。詳しくは佐藤利行「王羲之書翰繫年考証」（『国文学論集』第十五号 安田女子大学）を参照。

〔4〕佐藤利行「六朝漢語の研究―王羲之の書翰の場合―」（『安田女子大学紀要』第十四号）、佐藤利行「王羲之書翰中の語彙」（『広島大学大学院文学研究科論集』第六十九号）を参照。

〔5〕佐藤利行「王羲之と五石散」（『広島大学大学院文学研究論集』第六十五号）を参照。

〔6〕『魯迅全集』（人民文学出版社）「而已集」所収。訳文は松井博光（代表）他訳『魯迅全集』5（学習研究社）に拠った。

〔7〕羲之の兄の籍之、その子の延期については、森野繁夫『王羲之伝論』（白帝社）を参照。